せりがやだより

横浜市立芹が谷小学校　　　令和５年　７月学校便り

本物の「信頼」

児童支援専任　白川　啓介

私は、学生時代にテニスをしていました。そんな私が、最近感動したことがあります。それは、全仏オープンテニスの混合ダブルスでの加藤未唯選手とティム・プッツ選手の優勝です。加藤選手は、優勝後、コーチらに向けて声を震わせながら、「いつも一緒に頑張ってくれて、しんどい時にも一緒にいてくれた」と感謝の言葉を口にしていました。そのコメントを聴いて、私も胸が熱くなりました。女子ダブルスでは、失格になってしまった加藤選手の心の支えになったのは、ティム選手やコーチへの「信頼」だったのだと感じました。そこで今回は、この「信頼」について、考えてみました。

子どもたちの会話を聴いていると、「信頼」とか「親友」という言葉をよく耳にします。しかし、そこで私はいつも「そんな簡単に使える言葉なのかな」と考えてしまいます。私が小学生のころ、友達に「親友になろう」と言われたことがあります。正直そこまで仲が深まっているわけではなかったので、そう言われて困ったことをよく覚えています。「信頼」や「親友」という言葉は、相手に押し付けるものではありません。**「相手を信じて、相手に頼る」**どちらも主役は相手です。だから私は、相手にどう思われているかわからないのに、「信頼しているよ！」「親友になろう！」というのは、とても軽々しい言葉に感じてしまいます。**あくまで信頼は、互いに思う相互関係で成り立つのだと思います。**

表面的な信頼は、一方的に無条件に相手を信じれば、誰に対してもできます。しかし、それでは、本物の「信頼」にはつながりません。それを本物に変えるためには、**「相手とたくさん関わり、お互いのことをたくさん知ること」**が必要だと私は考えます。数回の関わりだと、その人の一部分しか見ることができません。その時、見えた部分が良い面でも悪い面でも、それがその人のイメージになってしまいます。しかし、たくさん関わりをもてば、その人の本当の姿が見えてきます。良い面も悪い面も知ってはじめて、本物の「信頼」ができるのではないでしょうか。

本物の「信頼」は、日々の積み重ねが必要なので、簡単には得られません。だから容易に信頼という言葉を使うのではなく、まずは、信頼を得られる行動が自分からすすんでできる子を芹が谷小学校でも育んでいきたいです。そのためには、学校や家庭で、日々子どもに声をかけ、信頼関係を築こうとする姿勢を示し、手本になる必要があります。そうすることで、加藤選手のような心の支えをたくさんつくれる子が増えると信じています。また、地域・家庭・学校間でも、「信頼」を大切にしたいです。先日「白川の記事を楽しみにしています」と声をかけてくれた方がいました。「見てくれているんだ」ととてもうれしかったです。そういった信頼につながる何気ない一言が言い合える関係を今後も築いていきたいです。

共（とも）にチャレンジ　みんな輝（かがや）け！